



たいこもち ゆうげんてい
お座敷哲学
「名人を知る名人」

「名人を知る名人」

歌舞伎声色、落語家、常磐津、日本舞踊といろいろな芸能を習得して昭和十年より幫間になった悠玄亭玉介さん

(1907〜1994年)は幫間の第一人者と言われ、荒川区に住まいがありました。吉田茂、佐藤栄作など歴代の首相や政財界など多くの著名人からひいきにされておりました。

幫間の「幫」は助けるという意味で、「間」は人と人の間、すなわち人間関係をあらわします。幫間は人間関係を助けるという意味となります。映画や落語に出てくる幫間は軽く描かれていますが、違います。お客様を気持ちよく遊ばせるためにあらゆる便宜を図り、雰囲気や途切れた時盛り上げるために繋いでいく遊びの番頭が幫間です。

「ご子息の重頼さんより、お借りした「いつもお祭り気分」「幫間の遺言」「たいこもち玉介一代」から抜粋・要約したものを掲載致しました。

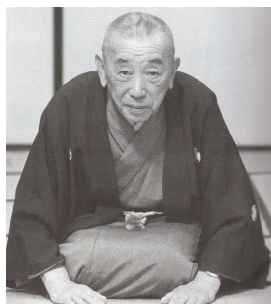
「よく口は禍のもとなんていうだろ。ひとつしかない口だ。口より上にあるふたつの耳で人から聞いたことをよく考えてしっかりしたことをいわなけりやいけない。」

「人間は一升のマスのようなもの。欲は必要だが、欲張っちゃいけない。欲張ると、こぼれちゃうからな。人生、八合五勺でいい。」

「相手の目を見てお辞儀する。」

お辞儀をするときに、扇子を自分の前に横に置く。これを結界っていうんだ。

かみてもて上手下手の隔てをつけるため、扇子を横にして線を引く。お客様を上にとえ、自分たちは下がりましたということの意味なんだ。お客様から視線を離さず、まわりの雰囲気を観察する。お辞儀している間に自分のつく場所を大体検討つけておく。もちろん



ん、お客様の下座に座るんだ。」

「お座敷はお客様相手のたいこもちの戦場。だから、お座敷のことを修羅場という。」

芸人は芸をやっているときに真剣であるとかくだける。ところが、たいこもちでえのは逆で、芸をしているときに遊んで、芸が終わったら真剣勝負。修羅のほ

うが長い。たいこもちは「間」が勝負。お客様が実際いる修羅場で修業するしかないんだから。お客さんを白けさせたら、そのたいこもちには修羅場が下手なんだ」

「人に惚れ、仕事に惚れ、そういう自分に惚れる。そうなれば、人は黙っていてもついてくるし、全てうまくいくよ。ダ

メをダメにしちゃわないうこと、それが肝心だね。仕事に惚れるってことは、ある意味じゃ、自分を磨くことになる。

精出せば凍る間もなし水車

どんなに寒いところだつて凍らないんだよ、一生懸命働いていけば。」

「一怒一老。」

今日一日が幸福だった人は幸福で、そうでなかった人は不幸だよ。人生なんて、今日の連続だ。今日の積み重ね。今日が、幸福になれなくて、いつ幸福になれますか。腹を立てたら損だよ。」

「倒されし 竹はいつしか立ちなおり 倒せし雪は 消えてなくなる

雪が積もって、竹を倒す。雪も竹を倒したつもりだ。ところが雪はいつしか消えて、竹は辛抱していればいつか立ち返る。」

「人間の財産とは何か。信用です。人が言っている信用と書く。「あの人が言うんだから間違いない。やってみよう。」というのが信用なんだ。信用される人になるにはまず人を信用してあげなければいけない。」

玉介さんの粋な言い回しから、当時の花柳界の息遣いが感じられます。

書籍「いつもお祭り気分―幫間の世界」町屋図書館、「たいこもち玉介一代」はゆいの森・日暮里図書館にあります。また、ネット通販でも販売されています。